京に**入り立ち**(四段・用)**て**(形・シク・終)うれし。家に**至り**(四段・用)て、門に**入る**(四段・体)に、月明かければ、いとよくありさま(形・ク・已)**見ゆ**(下二・終)。

聞き(四段・用)しよりもまして、言ふかひなく(係助)**ぞこぼれ**(下二・用)**破れ**(下二・用)たる(存続「たり」体)。家に**預け**(下二・用)たり(存続「たり」用)つる(完了「つ」体)人の心も、**荒れ**(下二・用)たる(断定「なり」用)なり(詠嘆「けり」終)けり。

「中垣こそ(係助)**あれ**(ラ変・已)、一つ家のやうなれば(比況「やうなり」已)、**望み**(四段・用)**て預かれ**(四段・已)るなり(存続「り」体)。」「さるは、たよりごとに、ものも絶えず(副詞)**得**(下二・未)させたり(使役「さす」用)。」「今宵、**かかる**(ラ変・体)こと。」と、声高にものも言はせず(四段・未 打消「ず」終)。いとはつらく(形・ク・用)**見ゆれ**(下二・已)ど、こころざしは**せ**(サ変・未)**む**(意思「む」終)と**す**(サ変・終)。

さて、**池めい**(四段・用)て**くぼまり**(四段・用)、**水つけ**(四段・已)る(存続「り」体)所**あり**(ラ変・終)。ほとりに松も**あり**(ラ変・用)き(過去「き」終)。五年六年のうちに、千年や(係助)**過ぎ**(上二・用)にけむ(完了「ぬ」用 過去推量「けむ」体)、かたへは**なくなり**(四段・用)にけり(過去「けり」終)。今**生ひ**(上二・用)たる(完了「たり」体)ぞ(係助)**混じれ**(四段・已)る(存続「り」体)。

おほかたの、みな**荒れ**(下二・用)にたれば(完了「ぬ」用 存続「たり」已)、

「あはれ。」とぞ(係助)人々**言ふ**(四段・体)。

都に立ち入って嬉しい。家に着いて、門に入ると、月が明るいので、たいへんよく、(家の)様子が見える。

(噂で)聞いていたよりもいっそう、どうしようもなく壊れ、傷んでいる。

家の管理を頼んでいた人の心も、すさんでいたのだなあ。

「(筆者の家との間に)垣根はあるものの、一軒の家のようであるので(隣の家の人が)希望して預かったのである。」「それでも、(京への)ついでがあるたびに、お礼の品も絶えずあげていた。」

「今夜は、このような(ひどい)ことだ」と、(家来たちに)大声で言わせたりはしない。とても(隣の人は)薄情だと思われるけれど、お礼はしようと思う。

さて、(庭に)池のようにくぼんで、水に浸かっているところがある。そのそばに松もあった。(家を留守にしていた)五、六年の間に、千年も過ぎてしまったのだろうか、一部分はなくなってしまっていた。今生えたものが混じっていた。

ほとんどすべてが荒れてしまっていたので「ああ(ひどいことだ)。」と人々は言う。

©高校古文No.1授業ノート　https://kobun.info/